

グループホーム 虹の家から

『しおかぜ』と『みちづか』の生活の中でさまざまなとりくみでは地域の方々と交流や日々を過ごしています。

グループホーム同士の交流ーしおかぜ

4月26日(火)、同じ地域にある『グループホームきらら大森東』に入居している3人の方が、しおかぜに遊びに来ました。こうしてグループホーム同士の交流は初めてのことです。

この日は、生協組合員の波多野さんにお知り合いの方を連れてきて、手品を披露してくれました。波多野さんは、たびたびしおかぜを訪れていろいろな手品を見せてくれます。また、隣



子どもたちと一緒に手品を楽しみました

保育園の子どもたちとは頻りに交流しているので、道で会うと「しおかぜさくくん、こんにちは」など

とよく声をかけてくれます。とても楽しい1日となり、今度はしおかぜからグループホームきららへ遊びに行く約束をしてお開きとなりました。

きんかぎ

by #71 ス



おははカリナーに入れたら、飲みこまねばいよう...



オブラートにくるんでもいいけど...



大ききおとこのみずういからいくつかに分けて...



お困りですか？

毎月お茶会を... ーみちづか

3月に行われたみちづか運営推進会議での報告で、お茶会を



本格的なお茶を楽しみました

やっても良かったと話をして、民生委員の方がお茶の先生を紹介してくださいました。

後日、先生がみちづかへ来てくださり、本格的なお茶を点ててくれました。1時間ほどでしたが、入居者さんは、美味しいお茶とお菓子で静かなひとときを過ごしました。これから、毎月来ていただけるということになり、みんなで楽しみにしています。

救急医療情報キット

大田区用

①救急キット 申込書兼利用者情報シート

氏名	姓	名	生年月日	年	月	日
性別	血液型	型	電話番号	()		
住所	大田区					

かかりつけ医

病名	科	住所及び電話番号
1		
2		
3		

※ 救急時は、あなたの症状により直近にある別の医療機関に搬送することもあります。

持病や過去の大きな病気

1			
2			

ご家族などの連絡先

氏名	性別	住所
1		
2		



毎年6月に行う「お元氣ですか訪問」で、いざという時の不安がある方にお渡しする『救急医療情報キット』をご紹介します。一人暮らしや家族のいない

ときに急病で倒れてしまった場合など、救急車が駆けつけた際、その人がどんな持病、血液型、どんな薬を飲んでいるか、かかりつけの病院があるか、緊急連絡先等の情報があれば、救急隊員は迅速に対応することができます。

このキットの中身は簡型ケース、利用者情報シート、玄関用シール、冷蔵庫用マグネットです。情報シートに氏名、生年月日、かかりつけの病院名、持病や服用しているお薬、緊急連絡先などを記入します。それをケースごと冷蔵庫の中に入れておきます。玄関の内側にシールを貼り、マグネットは冷蔵庫に貼り付けておきます。救急隊員は、それを確認し情報を得ることが出来ます。

ヘルパーステーションすずらん「かがやき事例」その4

利用者の笑顔 家族の笑顔

7年間訪問している利用者さまの事例です。サービス開始のきっかけは、1日中独居の生活でうつ傾向になり、何事もおっくうになるなど問題が出てきたことが発端でした。認知症の症状が出てからは、徘徊・昼夜逆転に加え、以前にも増して意欲の低下が見られました。行動範囲が狭くなり、生活動作の低下を感じられました。

最高の充実感

こうした中で、次第にご本人も意欲が出て、しっかりと入院してきた矢先、脳梗塞を起こし入院となりました。高齢であるため、ご家族は死を覚悟していました。私たちが当初、在宅復帰は半信半疑でした。しかし、入院先での対処がよかったようで、めざましく回復し退院の運びとなりました。退院時の担当者会議では、ご家族・ケアマネ・医師・ソーシャルワーカー・病棟ナース・理学療法士・訪問看護・ヘルパーステーションと、関係者が全員集まり在宅での体制を確認していました。

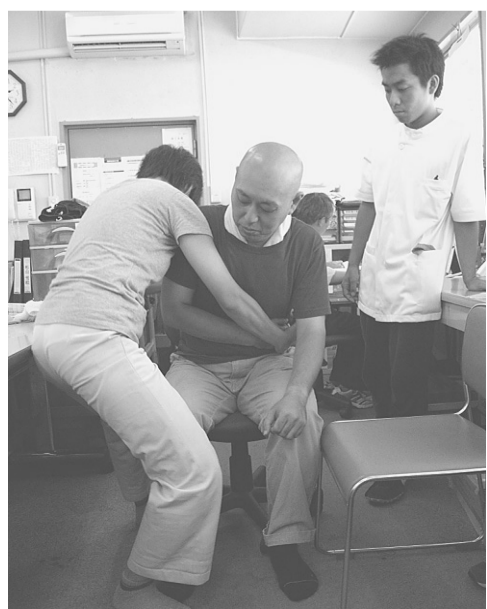
少しずつ前へ

ご本人の状況はますます悪くなってきました。デイ通所の意欲がなくなり、歩行もままならなくなりました。私たちはミーティングを何度となく行い、改善案をケアマネジャーに訴え続けました。ようやくケアマネジャーの勧めで、何年かぶりに受診することができました。栄養不足が判明したために、医師の指導で定期的に栄養補給を行い、少しずつ元気が出てきました。外部との交流や日常の生活動作の低下を防止するために、デイサービス再開を提案しました。デイ通所が途絶えないよう、デイスタッフの協力も仰

ぎました。眠っていてデイに行きたがらないご本人を説得するところから始まり、支えるような手引き歩行でトイレ介助を行いました。洗面、更衣、水分補給、必要な時には寝具を交換し、記録していきました。家族あてのノートにもその日の状況などを記入しました。デイのバスポイントまで見送るようになったところ、デイ通所が継続するようになりました。

ご家族は「こんなに多くの皆さんが母のことを心配してくれているんですね」と感激されていました。帰宅されてからは寝たきりにならないように、ポータブルトイレで移乗の実践をしたり、負担軽減のため、ヘルパーの入室時間を提案したり、吸いのみやストローを持参し水分補給を促し、経済的な助けとして事業所にあるオムツやパッドを提供しました。食事や衛生面が充実してくるにつれて、ご本人からも暗い発言はなくなってきました。今ではご家族は「母が元気になつてうれしい、在宅で面倒をみる自信が出てきました」と話されています。

さまざまな家族の歴史や環境因子がある中で、在宅での介護の醍醐味は、介護をする側もされる側も一緒にいる幸福を感じることだと思えます。私たちはその手助けができた時、最高の充実感を得ることが出来ます。「利用者の笑顔 家族の笑顔」これが訪問介護の大切なキーワードです。



身体介助の研修